

地域の農家と地域の消費者をつなぐ「キッズ農園」 「登下校のとき子どもたちが野菜の成長具合をチェックしてくれました」

「農業体験は食育の一環。収穫して食べるだけでなく、農業の苦勞も伝え、食の大切さや農業に対する理解を深めてほしい」「地場産野菜への関心を高め、地域への愛着心を持ってほしい」。大和高田市担い手営農研究会の願いは、主催する「キッズ農園」を通して、少しずつだが確実に消費者に伝わっていく。小学校区ごとの身近な体験で、子どもにも親にも農業が生活の一部になってきた。

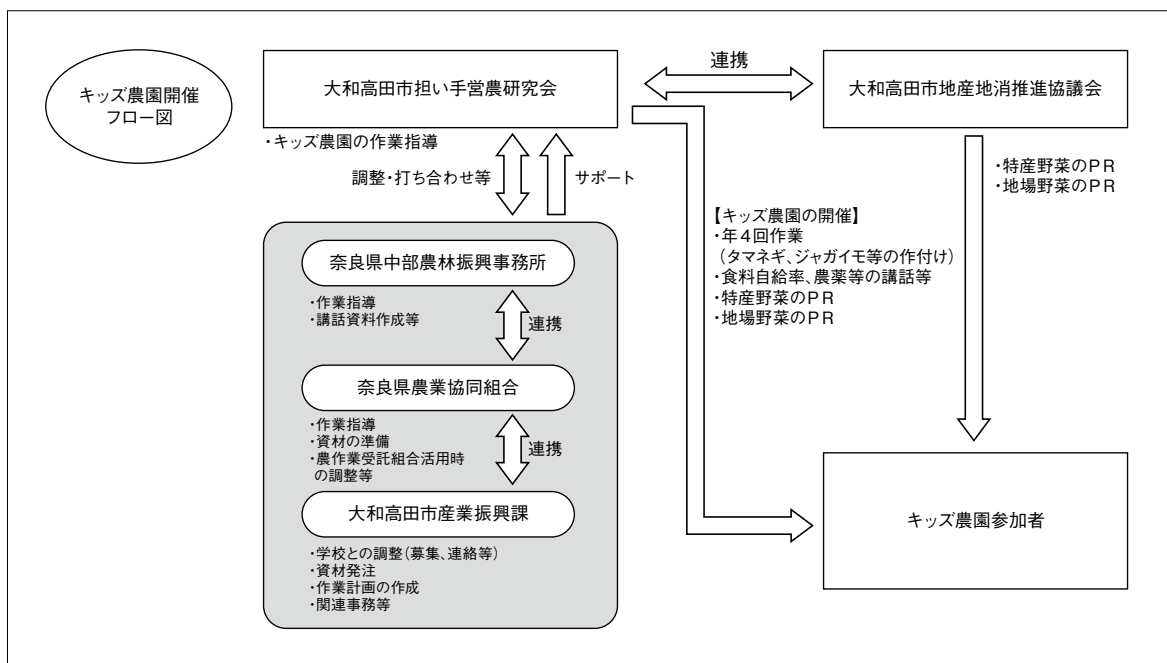
大和高田市担い手営農研究会「キッズ農園」

取組主体

- 名称：大和高田市担い手営農研究会「キッズ農園」
- 担当窓口
担当課(者)：大和高田市市民部まちづくり振興産業振興課 奥 康弘主任
住所：奈良県大和高田市大中100番地の1
電話：0745-22-1101 (代) FAX：0745-52-2801
E-mail：nousin@city.yamatotakada.nara.jp
- 団体等の属性：農林漁業者
- 構成員数：12人
- コーディネーター等：連携団体と検討のうえ取組を進めている
- 活動内容を紹介するHPアドレス：なし
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業に関する団体、市町村
内訳：下図参照
主催：大和高田市担い手営農研究会、大和高田市地産地消推進協議会
大和高田市産業振興課
協力：奈良県中部農林振興事務所、奈良県農業協同組合



「キッズ農園」の看板



取組地域及び地域の特徴

取組地域：奈良県大和高田市

地域の特徴：

大和高田市は、奈良県西北部、奈良盆地の西南部に位置し、総面積16.48平方キロメートルと全国でも有数の小さな市である。人口は7万2000人余りで、人口密度が高く、都市化が進んでいる。昔から商工業の町

として発展してきているが、市域の周辺部は農業地帯を形成し、米の他野菜・花卉の生産が行なわれている。市内の農家戸数は1300余りで、耕地面積は約420ha、農家1戸平均の耕地面積は約30aと小規模である。

取組内容

(1)目的(目標)

農業体験を食育の一環と位置づけ、収穫して食べるだけでなく、農業の苦勞も伝え、食の大切さや農業に対する理解を深めること。また、大和高田市の農業や栽培されている作物について市民の認知度が低いことを知り、地場産野菜に触れる機会をつくり地産地消の推進につなげることも目的に「キッズ農園」を開園している。平成22年3月に策定された「大和高田市食育推進計画」では「キッズ農園」への参加数の増加が示され、市民への農業体験の場を提供することも目的としている。

(2)取組開始時期・経緯

平成18年に、「大和高田市地産地消推進計画」の取組みの一つとして、地域水田農業推進協議会の構成員である担い手営農研究会が主体となり、「キッズ農園」の取組みを始める。

これまでも研究会会員それぞれが、各校区においてボランティアで農作業の指導を行っていたが、市の取組みとして「キッズ農園」を開園した。

募集地域を市内小学校区単位とし、同市保健センターとも連携して大和高田市食育実践計画モデル校区(平成19～21年)での「キッズ農園」の開園とモデル校への農業指導も実施、食育の推進に努めている。

(3)対象作物

野菜

作物名・種類:タマネギ、ジャガイモ、ブロッコリー、キャベツ、大和高田市特産野菜など

選定理由:タマネギ、ジャガイモを収穫祭でのカレーづくりの食材として栽培。また、指導する生産者の農繁期を避けて、管理等含め無理なく取り組むことができるように冬場の作物を選定。大和高田市特産野菜は市として推進している作物で地場産野菜を知る機会となり、地産地消につながる。

(4)具体的な取組内容

ア 市内小学生親子を対象に、主にタマネギとジャガイモを栽培し収穫時に参加家族でカレーをつくって食べるなど、年4回「キッズ農園」を開園。11月のタマネギの植え付けに始まり、5月下旬の収穫までの作業を指導している。開園日には、タマネギ、ジャガイモの栽培指導(植え付け、芽かき、草引き、収穫など)を中心に、特産野菜5品目(キクナ、コマツナ、シロナ、ハウレンソウ、ネギ)の紹介や栽培などを行なっている。

期間中、研究会のメンバーが参加家族の担当者として農作業の指導や参加者からの疑問に答えるなど、より一層コミュニケーションを図ることができる体制づくりをしたり、農機具に触れる機会を提供するなどさまざまな体験ができるように工夫している。ほ場管理などは必要に応じて、生産者、農作業受託組合に委託している。

通常の管理や成長の観察などは参加家族が行なっている。

イ 近年では、大和高田市の農業や農薬使用の必要性、食料自給率などの講話を行なうなど、農作業だけでなく、「食」の学習にもつなげている。講話の説明資料は奈良県中部農林振興事務所から資料提供と説明に関する助言を受けている。

- ウ 参加者へは、地場産野菜への関心を高めてもらえるよう、農産物品評会や直売所に関する情報提供も行なっている。
- エ 参加者の募集は実施校区内小学校の協力を得て、募集チラシの配付を行なっている。



ホウレンソウの種まき

(5) 年間スケジュール

11月第1週	タマネギの植え付け(タマネギの種ってどんな種?) キャベツ、ブロッコリーの植え付け、特産野菜の播種
2月第2週	ジャガイモの植え付け(メークイーンと男爵の違い)
4月第1週	草引き、ジャガイモの芽かき(野菜苗の接ぎ木について)
5月第4週	収穫とカレーライスづくり

開園日には、大和高田市の農業や食料自給率、農業についての講話も行なっている。

(6) 参加者数・属性の実績及び推移

募集対象者：市内在住小学生親子10～15組、参加者は小学校低学年が多い。

平成18年 親子17組(51名) 平成19年 親子12組(36名)

平成20年 親子12組(35名) 平成21年 親子10組(30名)

※体験は場は実施校区内の遊休農地、耕作放棄地等を利用。

(7) 経費

- ・参加費として1家族1000円(傷害保険、材料費等)
- ・諸経費(肥料、苗代、作業賃金等)は、市の予算(地産地消推進事業)を使用。
- ・年4回の「キッズ農園」での作業指導等は研究会メンバーがボランティアで実施。
- ・研究会会長が開発した肥料の販売利益の一部を資材購入に活用。



農業機械

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

- ア 大和高田市担い手営農研究会の発足当時から、連携団体が年数回程度の会議等に出席しており、情報交換、視察等、農業振興に関する取組みを進めていたこともあり、「キッズ農園」にもスムーズに取り組むことができた。
- イ 毎年「キッズ農園」の開園に向け、同研究会、関係団体が集まり、アンケート結果を基にメインの農業体験や、新たな取組みを検討している。
- ウ 無理なく取組みが継続できるよう、研究会会員数等を考慮し、参加家族数を10～15組程度の小規模に

設定したり農繁期を避けた栽培作物を選定したりしている。通常管理と開園時など各々の取組みに応じて団体の役割を明確にすることにより、円滑な運営が可能となっている。

【関係団体と役割】

大和高田市担い手営農研究会……作業指導等

大和高田市地産地消推進協議会……特産野菜、地場野菜のPR

大和高田市産業振興課……学校との調整(募集、連絡等)、作業計画作成、資材発注、関連事務等

奈良県中部農林振興事務所……作業指導、講話資料作成等

奈良県農業協同組合……作業指導、資材の準備、農作業受託組合活用等の調整等

●コーディネーターの存在の有無

関係団体が集まり毎年取組み計画を立てている。

●ほ場での運営の課題と対処方法

ア ほ場の選定の要件として、学校に近く、周辺に収穫祭でのカレーづくりができる施設(公民館など)があることが挙げられるが、大和高田市は市の中心が市街化区域で周辺に農地があるため、校区によってはほ場の確保が難しい場合もある。

イ 開園までの土づくりやほ場整備(畝づくり、マルチ引きなど)は、農作業受託組合等に委託し、研究会は開園時の指導を中心に取り組む。収穫までの管理は参加家族にまかせている(役割を明確にしている)。

ウ 小学校区を単位に募集することで、小学校からの協力も得やすく、開園案内チラシの配付や施設の利用(トイレなど)も可能。

駐車場の確保は難しいが校区内で実施しているので、徒歩・自転車での参加が可能である。

また、通学途中にはほ場があるため、作物の成長状況がわかり、子どもたちの関心が高まるとともに日頃の管理作業にもつながる。

●安全管理

メンバーが安全面へも気配りできるよう、募集家族数を10～15組程度に設定するとともに、家族単位の行動により保護者が子どもの安全を確認できるようにしている。また、傷害保険にも加入(参加費から充当)している。



農業の話

これまでの成果

- (1) 農家と参加者のコミュニケーションを図ることができ、生産者と消費者の距離が近くなった。また、地場産野菜への関心を高め地域への愛着心を持つことにつながった。
- (2) 直売所や農産物品評会の案内をすることで、地場産野菜を知ってもらう機会となり、地産地消につながった。
- (3) 参加した保護者から、子どもだけでなく親も勉強になったと好評を得た。
- (4) 家庭では体験に関する会話も増え、「食べもの」について考えるようになった。

大和高田市担い手営農研究会「キッズ農園」 みんなのコメント集

取組の 実践者

「参加している保護者は30代～40代で農業体験にちょうど一番馴染みの薄い世代。保護者も楽しみに、そして子どもも泥んこになって遊ぶ日が“キッズ農園”だと思います」

「最初に体験した子どもがどのように変化していくのかも見てみたいです。できれば中学生や高校生にも体験させたい」

「地産地消や食育は継続することが大切。『キッズ農園』での体験は一生覚えていてくれるのではないかと、地域の農業を知る機会が地産地消につながるのではないかと、そう思ってやっています」

「直売所はどこでも取り組んでいるので、研究会としては『キッズ農園』の取組みを広めていきたいと思っています。体験者のなかから農業に関心を持つ子どもが出てきてくれたら嬉しいし、子どもの頃の体験が大人になっても心に残り、後継者として地域を盛り立てていってほしいです」

「最近では大人が与えるばかりで、子ども自らがやりたいという場面がありません。野菜づくりや花づくりは自分がしてあげられること、自分が主役になれる場所だと思います」

参加者

「作付けから農業体験をすることはなかなかできないので、子どもだけでなく、親にとっても良い体験でした」

「学校の授業では体験できないことがたくさんでき、作物づくりの大変さや苦勞を味わった子どもたちから物を大切に作る気持ちが少し出てきた気がします」

「スーパーでの地元の野菜を見ると愛着を感じるようになりました」

「畑が校門の前であって、子どもを迎えに行くついでに野菜の成長の様子を見ることができたことも良かったです」

「小学校の登下校のとき、“草がはえている”、“ホウレンソウが伸びていた”など子どもがチェックしてくれて、夕方、草取りや収穫によく出かけました」

「普段はホウレンソウなどあまり食べない子どもも『キッズ農園のホウレンソウや!』といいながらよく食べていました」

「スーパーのものと違い土がついていて、枯れたところなどもあり、調理するまで手間がかかることを、子どもたちは改めて感じていました」

「野菜の種類を増やしたり時期を変えたりしていろいろな物をつくってみたいです。次回も参加したいです」

「野菜の接ぎ木みたいなことを教えて頂いて、興味深かったです。農業に面白みを感じました。子どもにもいろいろと未知の世界を見せてあげることができて親子ともに嬉しいです」

「雨の日も寒い日も、行ってみれば楽しくて、普段では考えられないくらい泥まみれになり、洗濯は大変でしたがすごくいい経験ができました」

「子どもたちが夢中になって、作業している姿がすごく嬉しく思えました」

「ネギはそのまま、プランターに植えて今も頂いています」

「まわりでも“やればよかった”という人が多いので、募集のやり方や内容をもっと伝えれば、たくさんの人が集まると思います」



カレーづくり